

G-2

アイヌ語沙流方言における親族名詞の限定所有と呼格的用法

—フレーム意味論による分析—

喜多 直人 (東京大学大学院)

n-kita5332@hotmail.com

1. 本発表の目的

アイヌ語沙流方言 (以下アイヌ語)¹⁾における親族名詞が主要部名詞となる限定所有 (attributive possession) を本発表は取り上げる。互いに形態統語論的に異なる限定所有の観察を通した上で、親族名詞の呼格的用法という意味用法を手掛かりに分析を行う。具体的には例 (1) のような文法現象に分析の重点を置く。

| | | |
|----------------------|-------------|--------------------|
| (1) a. <i>ku=kor</i> | <i>hapo</i> | b. <i>k=unu-hu</i> |
| 1SG.A=～の | お母さん | 1SG.A=母-POSS |
| ‘私のお母さん’ | | ‘私の母’ |

アイヌ語の限定所有は所有対象名詞²⁾の譲渡可能性 (alienability) によって形式に差異が発生すると類型論的には分析されてきた。アイヌ語の親族名詞に関しては (1) のような形式的な対立がたとえ同じ指示対象であっても観察される。発話上における両者のステータスやニュアンスが異なっているということは田村 (1988a: 33-34) など先行研究では指摘されているが、それが限定所有の形式の違いに結びつく理由についてはこれまで十分な記述がなされていない。形式的差異が 2 つの親族名詞の意味的な違いに由来していることを本発表は主張し、アイヌ語の所有カテゴリーを統一的に説明できる枠組みを提案する。

2. 所有名詞句の全体像

例 (1) でも見た通り、限定所有においては人称接頭辞が所有者を指示する役割を担う。(1a) は「～を持つ」という意味の動詞 *kor* を用いた「人称接頭辞 + *kor* + 所有対象名詞」という構造を有する。この形式を以降 A タイプと呼称する。もう一方の (1b) は「人称接頭辞-所有対象名詞-接尾辞 (POSS)」という構造を有する。同様に以降は B タイプと呼称する。

親族名詞とそれを用いた所有の具体的な分析の前に、それぞれの所有形式が典型的にどのような関係性を表すのかを見てゆこう。通言語的に所有が表すとされている 3 つの中核的意味に基づいて分類する。その 3 つの中核的意味とは、所有権関係 (ownership relations), 全体-部分関係 (whole-part relations) そして親族関係 (kinship relations) である (Langacker 2009: 83)。このうちの親族関係が関わっていると思われる所有については次節以降に詳しく検討するため本節では除く。

また、本発表では所有の分析において参照点構造 (reference point constructions) およびフレーム意味論を用いる。参照点構造を所有に適用した場合、「参照点 (=所有者) を経由してそれと関係するターゲット (=

¹⁾ アイヌ語は日本列島北東部、現在の北海道から樺太において話されてきた言語である。他の言語との系統関係は不明である。基本語順は SOV で、膠着的な特徴を持ち抱合による語形成も頻繁に行われる。動詞にはその行為の参与者を示す人称接頭辞が付く。沙流方言は日高地方沙流川流域の下流～中流において使用されてきた方言である。

²⁾ 本発表では「所有者」「所有対象」といった場合は名詞や接頭辞によって指示される対象のことを意味し、「所有者接頭辞」「所有対象名詞」といった場合は接頭辞や名詞句という言語表現のことを意味する。

所有対象)を理解する」という概念構造が3つの中核的意味を含めた全ての所有に共通していることがわかる。またフレーム意味論は、言語外的な事実も言語表現を形作る上での言語的な意味に含める必要があるという主張を中心とする(西村 2002:292-293)。すなわち、ある語彙項目の意味は日常的経験や習慣などを背景として理解されるということになる(cf. Fillmore 1982)。

以上の理論を背景に、まずAタイプが用いられている事例を検討する。例(2)を参照いただきたい。

- | | | | |
|-------------------------------------|----------------|---------------|-------------|
| (2) a. <i>a=kor</i> | <i>mampuri</i> | b. $\phi=kor$ | <i>seta</i> |
| 1SG.A=～の | お守り | 3SG.A=～の | 犬 |
| ‘俺の宝’ (K7708241UP 112) ³ | | ‘彼/彼女の犬’ | |

Aタイプが典型的に表す所有関係としては所有権関係であるということが言えそうである。所有権関係を他の関係から際立たせる1つの特徴としては、参照点を介さずとも概念として抱くことが可能であるという点である。全体-部分関係の部分とは異なり、お守りや犬は他の存在があってはじめて認識されるような性質のものではない。あくまで世界に存在する1つのお守り、1匹の犬として捉えられるという一般的知識が働いている。そのような対象を所有する際には財物として所有するというのが典型的である。

次にBタイプが用いられている事例を検討する。

- | | | |
|-------------------------|------------------|---------------|
| (3) a. <i>a=kema-ha</i> | b. <i>makiri</i> | $\phi=nip-ih$ |
| 1SG.A=足-POSS | 小刀 | 3SG.A=柄-POSS |
| ‘私の足’ (K7803231UP 219) | ‘小刀の柄’ | |

例(3)を見ると、Bタイプが表す1つの意味領域としては全体-部分関係が挙げられる。ここでは全体-部分関係を「あるものを何かの部分として認識するにあたり全体の認識が必須である関係」として定義する。そのため部分を指示する名詞の概念は参照点に概念的に依存するといえる。全体(3)では私、小刀)をなくしてはその部分は概念的に存在しえないという理解である。田村(2001[1964]:405)では「対象をある特定の何かまたは誰かに所属したものとして表現するときのみ、所属形が用いられる(=Bタイプとなる)」(傍点強調は原文、()内の補足は発表者による)と指摘されており、その典型事例は身体部位や物体の一部を構成している要素が所有対象であるときであると整理されている。

以上より、Aタイプは所有権関係を、Bタイプは全体-部分関係をそれぞれ典型的に表すと考えられる。参照点に対する所有対象の概念的な独立性で測った場合、前者は独立性が高く後者は低い。この観察を前提に、次節では親族名詞が所有対象名詞となる限定所有について検討する。

3. 親族関係が表す関係性の内部的差異

本節では親族関係、および親族名詞について分析を行う。所有対象名詞になった際に所有形式がAタイプになる親族名詞とBタイプになる親族名詞とがあることは例(1)にて確認した。そのようなペアが存在する親族名詞に分析対象を限定しつつ、使い分けが発生する状況を元に両者の意味的な差異を考察する。

³ 以降、中川・ブガエワ・小林(2016)の説話や神謡に付されている通し番号とその行数をこのように記す。

3.1 所有表現における親族名詞

例 (1) の母に加え父・祖母・祖父・息子の例を (4)~(6) に挙げる (各例文において太字強調は筆者による)。

- (4) a. [...] *a=kor* *mici* *i=hoppa* *siri*.
 1SG.A=~の お父さん 1SG.O=~を残して去る VIS.EV
 ‘**私のお父さん**が(私を)残して去る’ (田村 1984: 42)
- b. [...] *e=ona-ha* *ka* *an* *pe* *he* *an?*
 2SG.A=父-POSS ~も ある.SG NMLZ Q ある.SG
 ‘(あなたの)父親もいるのか?’ (田村 1986: 8)
- (5) a. [...] *a=kor* *ekasi* *a=kor* *huci* ϕ =*ekimne-pa* [...]
 1SG.A=~の おじいさん 1SG.A=~の おばあさん 3PL.S=山へ行く-PL
 ‘(私の)おじいさんと(私の)おばあさんは山へ行く’ (K7803231UP 49)
- b. [...] *a=ekas-i* *i=utek* [...]
 1SG.A=おじいさん-POSS 1SG.O=~を使いに出す
 ‘(私の)おじいさんに言いつかてきた’ (K7807151UP 53)
- c. [...] *a=suc-ih* ϕ =*cotca* [...]
 1SG.A=おばあさん-POSS 3SG.A=~を撃つ
 ‘(私の)おばあさんを撃つ’ (K7803231UP 147)
- (6) a. [...] *a=kor* *son* *a=e-pakasnu* [...]
 1SG.A=~の 息子 1SG.A=APPL=~に教える
 ‘(私の)息子に教えてやる’ (K7803231UP 43)
- b. ϕ =*po-ho* ϕ =*utek* *haw-e* *ne*.
 3SG.A=息子-POSS 3SG.A=~を使いに出す ~の声-POSS COP
 ‘(女神が自分の)息子を使いに出したのだ’ (田村 1984: 34)

このような形式的対立が発生する親族名詞のペアは、他にも *yupo* と *yu* ‘兄、お兄さん’ や *sapo* と *sa* ‘姉、お姉さん’ がある。特に *yupo*, *sapo* に関しては、所有者が 1 人称単数であるときのみ B タイプ (*ku=yupo*, *ku=sapo*) となるが、その他の人称では *e=kor yupo*, ϕ =*kor sapo* のように A タイプとなる (田村 2001[1964]: 401)。

これら 2 形式の意味・ニュアンス的な違いとして、田村 (1988a: 35) では、所有形式が B タイプになる親族名詞に比べて A タイプになる親族名詞の方が愛着のこもった表現である、という趣旨のことが述べられている。この記述的観察は重要であり、田村の言う愛着や親密さがどのような意味論的差異に根差しているのかも考察に含める必要がある。

ここで親族名詞が喚起するフレームについて考えてみよう。たとえば (4b) の *ona* に関するフレームには様々な背景知識が含まれている。典型的であるのは、基点人物との関係により把握される対象であるという一般的な知識であろう。「父」というのは「誰かの父」なのであり、親族名詞は「誰か」に相当する基点人物の概念を前提とする。*ona* が (4b) のような所有表現の中で使用されるとき、*e*=で指示される基点人物に対し

て親族関係を結んでいる対象としての父がフレームの内で焦点化されていると考えられる。

3.2 親族名詞の呼格的用法

前節で述べた通り、親族の意味を規定するには何らかの基点人物 (*ego, anchor*) を参照点として介入させる必要がある。しかし、基点人物との関係において把握される (=relational な) 親族に関する知識だけが親族のフレームに含まれる知識の全てではない。非関係的 (*non-relational*) である親族の側面 (cf. Taylor 1996: 337) に焦点が当たっている用例を本節にて検討する。

親族名詞には例文 (4) ~ (6) に表れているような指示的用法 (*referential use*) だけでなく呼格的用法 (*vocative use*) もある (鈴木 1973: 146-147, Dahl and Koptjevskaja-Tamm 2001: 203)。呼格的用法とは親族に呼びかける際に 2 人称表現的に親族名詞を用いることである。アイヌ語においては例 (7)~(9) が呼格的用法の例である。

(7) “*a=kor huci a=kor ekasi sekor e=haw-e-an* [...]”
 1SG.A=〜を持つ おばあさん 1SG.A=〜を持つ おじいさん と 2SG.S=声-POSS-ある.SG
 ‘『おじいさん、おばあさん』と言い’ (K7803231UP 131)

(8) “*a=kor son*, [...]”
 1SG.A=〜の 息子
 ‘(私の) 息子よ、’ (K7803231UP 11)

(9) a. *hapo!* ‘お母さん!’ (田村 1996: 171)
 b. *huci!* ‘おばあさん!’ (田村 1996: 207)

(7), (8) では所有者接頭辞と所有関係を表す ‘*PM=kor*’ (以下所有要素) がどちらにも表れている。所有要素を用いずに (9) のように呼びかけにおいて親族名詞を用いることも可能である。しかし全ての親族名詞が呼格的用法で用いることはできない。また、指示的用法であっても (10) のように所有要素によって所有者を明示することなく用いることができる親族名詞は限られている。

(10) [...] *micu utar* $\phi=e$ *kor* $\phi=oka$ [...]”
 お父さん PL 3PL.A=〜を食べる ながら 3PL.S=ある.PL
 ‘父たちが (何を) 食べているのだろう’ (K8108011UP 11)

では親族名詞の用法的差異に関して、どのようなことが記述されるかを見てゆこう。中川(2009: 103) では呼格的用法が可能であるのは (1a), (4a), (5a), (6a) に表れている親族名詞であり、呼格的用法が不可能であるのは (1b), (4b), (5b), (5c), (6b) に表れている親族名詞であることが記述されている。すなわち A タイプになる親族名詞は呼格的用法が可能であるのに対して B タイプになる親族名詞は不可能であるということである。ここにおいて、前者を親族名詞 A, 後者を親族名詞 B としてまとめると表 1 のようになる。

表 1 親族名詞の分布 (中川 (2009: 103) を元に作成)

| 語類 | 呼格的用法の可否 | 所有形式 | 例 |
|--------|----------|-------|---|
| 親族名詞 A | + | A タイプ | <i>mici, hapo, huci, ekasi, yupo, sapo, son</i> |
| 親族名詞 B | - | B タイプ | <i>ona, unu, sut, ekas, yup, sa, po</i> |

ただし、発表者自身のコーパス観察 (中川・ブガエワ・小林 2016 および田村 1984, 1985, 1986, 1988b, 1989) では、全体に対してわずかではあるが親族名詞 B が呼格的用法として用いられている例が散見された。例えば *ona* の使用例は 336 例あり、そのうち 329 例が指示的用法であり 7 例が呼格的用法であった。ただし 7 例はいずれも *a=ona-ha* のように所有表現としてのみ表れており、呼格的用法において (9) のような所有者接頭辞が付加されていない形式で用いられている例は認められなかった。親族名詞 B が所有者との関係において成立し、指示的用法において好まれる語彙項目であるというのは中川の記述と一致している。

3.3 考察

呼格的用法が可能であるという性質は、非関係的な親族としての側面を示唆する。非関係的な親族名詞はその指示対象が 1 人の独立した人間として認識されているものであると思われる。対象を親族名詞で呼びかける際、家族といったコミュニティ内での役割を指すものとして親族名詞が用いられる。さらに 1 家族に含まれている親族、例えば父の数は限定され、他に存在する父との対立は生じない。したがって「誰々の～」と基点人物を認識する必要性は薄れる。親族名詞 A の各語が喚起するフレームには「1 人の家族の成員」という知識に焦点が当たっていると考えられる。すなわち親族名詞 A は *k=ona(-ha)* という常に基点人物の存在が前提である表現と比べて「身の回りにいる (独立した) 1 人」といった意味合いが強い。アイヌ語では親族に関してそれが关系的か非关系的かによって表 1 のように語彙項目を使い分けるといった特徴があると考えられる。

呼格的用法として親族名詞 A が使用可能であることから、親族名詞 A は独立性が高いということが以上よりわかる。さらに、所有形式についても親族名詞の概念の独立性に由来することをここで強調しておきたい。2 節で見たように A タイプは独立性の高い対象との関係性、典型的には所有権関係を表す。他方 B タイプは独立性の低い対象との関係性、典型的には全体-部分関係を表すのであった。A タイプという構文は所有権関係に、B タイプという構文は全体-部分関係にそれぞれ記号的に結びついているということもできる。したがって独立性の高低という類似関係から、親族名詞 A の所有は A タイプに、親族名詞 B の所有は B タイプにそれぞれマッピングされる。

そして、親族名詞 A と親族名詞 B とは親密さに違いがあるという田村 (1988a: 35) の観察は、対象の親族が 1 人の独立した人間として扱われているということに起因するようと思われる。

(11) […] *a=kor* *totto* *haw-e-an.*

1SG.A=～を持つ おかあちゃん 声-POSS-ある.SG

‘私のお母ちゃまが言った’

(田村 1984: 34)

例文 (11) は、ストーリーの中心人物の 1 人である子供が母の言葉の引用を述べる際の台詞である。*totto* は乳房から母を指す幼児語へと転じた語である (田村 1996: 727)。元は身体部位を指示しており、部分名詞と

して所有対象となる際は *a=totto-ho* のように B タイプとなる。しかし親族名詞として用いられると (11) のような A タイプの所有形式となる。幼児が用いる、親密さを含意していると思われる親族名詞においても、所有対象の独立性の高さに由来する所有形式が観察されるのである。

4. まとめ

本発表では概念的独立性に着目して、親族名詞が 2 つの所有形式として表される意味的な動機付けについて考察を展開した。アイヌ語の所有体系においては、独立性が低いと B タイプに、高いと A タイプに、所有者と所有対象との関係性がそれぞれ表される。その記号的な対応関係は親族関係を表す限定所有においても共通しており、2 つの所有形式がアイヌ語の所有カテゴリーに構文知識として組み込まれていることが主張できる。今後の課題としては、本発表で扱ったもの以外の親族名詞（例えば、弟や妹など年少の同位親族を指す名詞）に調査対象を拡大することや、鈴木 (1973:158) にて分析されている親族名詞の虚構的用法 (fictive use) などさらに特殊な用法がどのように表されるかを検証することが挙げられる。

略号一覧

1/2/3…1/2/3 人称 A…他動詞主語 APPL…充当態 COP…繫辞 NMLZ…名詞化辞 O…目的語 PL…複数
PM…人称接頭辞 POSS…所属形接尾辞 Q…疑問 S…自動詞主語 SG…単数 VIS.EV…視覚の証拠性

参考文献

- Dahl, Östen and Maria Koptjevskaja-Tamm (2001) Kinship in grammar. In: Irène Baron, Michel Hersland and Finn Sørensen (eds.) *Dimensions of possession*, 201-225. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Fillmore, Charles J. (1982) Frame semantics. In: The Linguistic Society of Korea (ed.) *Linguistics in the morning calm*, 111-137. Seoul: Hanshin Publishing Company.
- Langacker, Ronald W. (2009) *Investigations in cognitive grammar*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- 中川裕 (2009) 『ニューエクスプレス アイヌ語』東京：白水社。
- 中川裕、アンナ・ブガエワ、小林美紀 (2016) 『アイヌ語口承文芸コーパス—音声・グロス付き—』。国立国語研研究所 (<http://ainucorpus.ninjal.ac.jp>) [2018年5月アクセス]
- 西村義樹 (2002) 「換喩と文法現象」西村義樹 (編) 『認知言語学I：事象構造』285-311. 東京大学出版会。
- 鈴木孝夫 (1973) 『ことばと文化』東京：岩波書店。
- 田村すず子 (1964) 「アイヌ語沙流方言の名詞 (その 1)」『早稲田大学語学教育研究所紀要』3. (ゆまに書房編集部 (編) (2001) 『アイヌ語考④ 文法I』394-420. 東京：ゆまに書房. 収録を参照した)
- 田村すず子 (編) (1984) 『アイヌ語音声資料 01』東京：早稲田大学語学教育研究所。
- 田村すず子 (編) (1985) 『アイヌ語音声資料 02』東京：早稲田大学語学教育研究所。
- 田村すず子 (編) (1986) 『アイヌ語音声資料 03』東京：早稲田大学語学教育研究所。
- 田村すず子 (1988a) 「アイヌ語」亀井孝・河野六郎・千野栄一 (編) 『言語学大辞典』第 1 巻：6-94. 東京：三省堂。
- 田村すず子 (編) (1988b) 『アイヌ語音声資料 05』東京：早稲田大学語学教育研究所。
- 田村すず子 (編) (1989) 『アイヌ語音声資料 06』東京：早稲田大学語学教育研究所。
- 田村すず子 (1996) 『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館。
- Taylor, John R. (1996) *Possessives in English: An exploration in cognitive grammar*. New York: Oxford University Press.